

「やらされ探究」から「マイ探究」へ!

生徒が主体的に取り組む学習であるはずの探究学習に「やらされ感」を抱く生徒、教師は少なくない。探究学習を生徒、教師が自分事化し、よりよいものとするためにはどうすればよいか、事例を通じて考える。

Turning Point

地域の課題と
生徒の関心をつなぐ
機会の創出

生徒が自分の関心と地域の課題との
接点を見いだして問いを立てる活動を、
時間をかけて丁寧に実施

宮崎県立小林高校

生徒の 転換点

- 「バーチャル市役所」や「地域巡検」などを通じて、地域の課題を知る
- 地域の課題を9つの分野に分類し、自分の関心との接点を見いだす

卒業後に地域を離れる生徒も自分事として地域の課題に取り組むことを目指す

宮崎県立小林高校は、「総合的な探究の時間」を「ミラソウ（未来創造の時間）」と名づけ、地域の課題を起点にした探究学習を展開している。2020年度より、小林市役所の職員から市の現状を学ぶ「バーチャル市役所」や、地域の史跡や施設などを訪れる「地域巡検」を実施し、生徒が自ら地域の課題を見いだせるようになってきた。一方で、生徒がミラソウで取り上げる地域の課題は、必ずしも生徒の関心事とは限らなかった。21年度の2年次の中間発表で、農家の後継者不足を課題に設定したチームの発表がひとつのことのような内容に感じた担当の

教師が「君たちは将来、農業をやりたいの？」と尋ねると、チーム全員が「いいえ」と答えた。「本校には、地元を離れて進学・就職する生徒が多数います。そのため、地域の課題を自分事として捉えにくく、生徒の関心や将来像と結びつきが弱い探究学習も少なからずありました」（ミラソウ主任・萩原圭一先生）
そこで22年度1年次の12～1月に、地域の課題と生徒自身の関心をつけて課題探究の問いを検討するための活動を組み込んだ（P.2図1）。具体的には、企業課題の解決やバーチャル市役所、地域巡検などを通じて見いだした小林市の課題を「健康・福祉」「IT・情報」などの9つの分野に分類。その中から自分が2年次に取り組みたい分野を選び、「解決



指導教諭
肥田木洋之

ひだき・ひろゆき
同校に赴任して3年目。英語科。



進路指導部ミラソウ主任
萩原圭一

はぎわら・けいいち
同校に赴任して4年目。理科(化学)。



探究科学コース主任
みらい会議座長
塚田一久

つかた・かずひさ
同校に赴任して10年目。数学科。



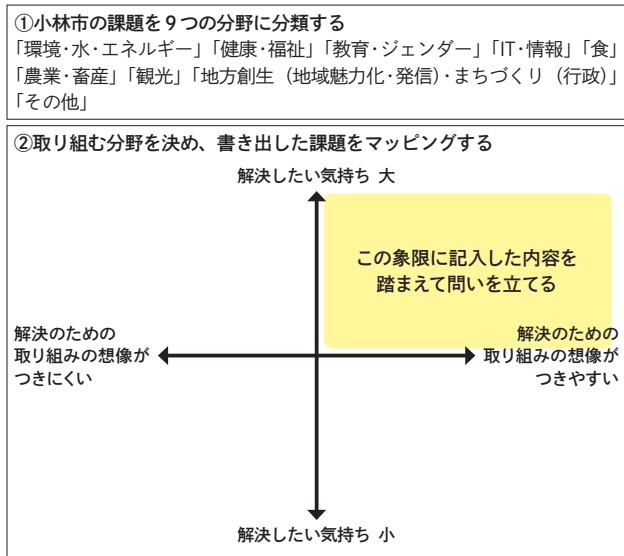
校長
黒木 篤

くろぎ・あつし
同校に赴任して2年目。

図1 1年次の「ミラソウ」の主な活動

月	普通科、普通科体育コース	普通科探究科学コース
4 5 6	探究の基本を学ぶ 企業課題の解決 地域の企業による講演 会と生徒発表会を実施。	探究の基本を学ぶ 教師や大学教授の支援 による探究活動を実施。
7	バーチャル市役所 小林市役所の約15の課の職員が来校し、各課の 業務や市の現状・課題を説明。	
8	オープンキャンパス参加	大学研究室訪問
9	職業研究	探究活動
地域巡検		
10	地域の名所や史跡、工場、ダムなどを訪問。	
11	「未来の小林」 小林市の理想とする未来 の姿を提案。	探究活動 地域の企業が提示する 課題に取り組む。
12	ミラソウの日(1・2年生合同発表会) 「未来の小林」探究活動の 成果を発表。	
1	課題探究(テーマ設定) 地域の課題と自分の関心 を踏まえ、探究テーマを 設定(図2参照)。	課題研究(計画立案) テーマ設定やリサーチ クエスト、先行研究 調査などを行い、研 究計画を立案。
2		
3	課題探究(問いの設定)	

図2 課題探究の問いの設定に向けたワーク例



ワークシートに、「あなたが将来したいこと」を書き出す欄を設け、生徒が関心を持つ課題と、希望進路との関連を意識させる工夫をした。

※学校資料、株式会社 Study Valley 製作のワークシートを基に編集部で作成。

学校概要

設立 1921(大正10)年 形態 全日制/普通科
/ 共学 生徒数 1学年約140人
2024年度卒業生進路実績 国公立大は、九州大、
熊本大、大分大、宮崎大、鹿児島大、北九州市立大、宮崎
県立看護大、宮崎公立大などに55人が合格。私立大は、
東洋大、日本体育大、法政大、近畿大、福岡大などに延
べ127人が合格。短大・専門学校進学23人。就職8人。

普通科に設置している探究科学コースも、生徒がより自分事として探究学習に取り組めるように見直した。1年次2学期に、地域の企業が提示する課題に取り組む、生徒が地域の現状や課題をより理解した上で、2年次に行う課題研究の計画(テーマ設定やリサーチクエストなど)を3学期に立案する。「生徒にはまず、自分が関心を持っていて、事柄を最大限書き出させ、それと地域の課題が重なる内容をテーマとして設定させます。そして教師は、生徒が抱いた疑問を解決するた

探究学習の自分事化には、
立てた問いを深める力が必要

「解決のための取り組みの想像のつきやすさ」の4象限にマッピングして(図2)、「解決したい気持ち 大」かつ「解決のための取り組みの想像がつきやすい」の象限に位置づく課題を基に問いを立てた。そして2月に、課題に対する思いが近い生徒同士でチームをつくり、改めて問いを設定することで、より意欲的に探究学習に取り組む生徒が増えた。

め、仮説や実証研究の方法を見通せるように、問いの立て方を支援します」(探究科学コース主任・塚田一久先生)

生徒は、地域の課題と自分の関心との結びつきや、希望する進路との関連を言語化したことで、「自分のやりたいことが探究学習でできる」と感じ、主体的に探究学習に取り組むようになった。例えば、防災学習の研究に取り組んだチームは、同校に併設する支援学校の生徒と協働で避難訓練を改善・実行したり、避難所生活の中で高校生にできる行動計画を、地域を巻き込む形で提案したりした。また、山岳部の生徒で構成されたチームは、地域の畜産農家で廃棄される脂身を活用した携帯補助食品の開発において、試作を繰り返す中で栄養価を明確にする必要性に気づき、実際に分析した。「今年度の『ミラソウの日』(1・2年生合同発表会)には70もの発表があり、生徒個々の関心事に基づく探究学習ができていてと感じています」と、黒木篤校長は手応えを語る。

一方で、新たな課題も見えてきた。生徒が関心を持っている分野の課題でも、生徒の表面的な探究学習に終わってしまったケースがあった。「探究的に思考を深めるためには、ミラソウだけでなく教科学習でも、生徒に物事を突き詰めて考えさせる必要があると痛感しています。そうした授業改善にも力を入れていきます」(指導教諭・肥田木洋之先生)